

カツオ 東部太平洋

Skipjack, *Katsuwonus pelamis*



管理・関係機関

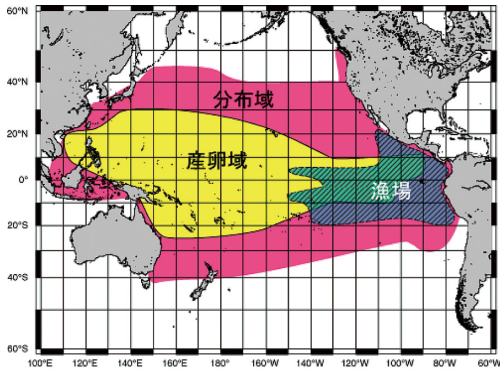
全米熱帯まぐろ類委員会 (IATTC)

最近一年間の動き

2012 年の中西部太平洋の漁獲量が約 166 万トンであるのに対し、2012 年の東部太平洋におけるカツオの総漁獲量は 27.5 万トンと中西部太平洋の約 2 割弱程度である。東部太平洋のカツオ資源状態は、2012 年に異なる手法 (a. 漁業・生物学的指標値; b. 標識データ解析; c. サイズ組成資源評価モデル; d. 空間資源動態モデル SEAPODYM) に基づいた結果を比較・検討して評価された。2013 年は漁業・生物学的指標値を更新し、8 つの指標値 (漁獲量、流れ物操業 CPUE、素群れ操業 CPUE、標準化努力量、平均漁獲個体体重、相対資源量、相対加入量、相対資源利用率) の傾向から資源状態を評価した。その結果、東部太平洋におけるカツオ資源の現状は不確実であるが、資源が悪化する明確な証拠はないと結論づけた。

生物学的特性

- 寿命: 6 歳以上
- 成熟開始年齢: 1 歳
- 産卵期・産卵場: 周年・表面水温 24℃ 以上の海域
- 索餌場: 熱帯・温帯域
- 食性: 魚類、甲殻類、頭足類
- 捕食者: まぐろ・かじき類、さめ類、海鳥類など



東部太平洋におけるカツオの分布と漁場 (Matsumoto *et al.* 1984, Schaefer 2001)

利用・用途

缶詰原料

漁業の特徴

現在の漁獲はほとんどがまき網によるもので、近年の総漁獲量は 20 ~ 30 万トンを維持している。まき網では、付き群れと素群れを対象とする操業があり、漁場はカリフォルニア沖から北部南米沖である。国別ではエクアドルが約半分を占め、次いでパナマ、ベネズエラ、コロンビア等が主要な漁獲国となっている。日本は本海域でカツオを主対象とした漁業を行っておらず、漁獲量ははえ縄による僅かな量のみである。

漁業資源の動向

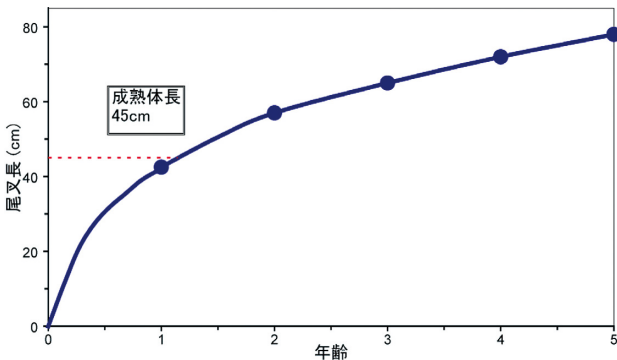
1950 年代までは竿釣りを主として約 5 万トンの漁獲であったが、1960 年代から竿釣りは急速に減少し、代わってまき網による漁獲が主となった。1990 年代から漁獲量は増加傾向にある。

資源状態

東部太平洋におけるカツオ資源指数の結果から資源状態を判断するのは難しいが、少なくともまき網の素群れ操業 CPUE も流れ物操業 CPUE も低下傾向は認められないため、東部太平洋のカツオは過剰に利用されていないと考えられる。また、標識データ解析、サイズ組成に基づいた資源評価、環境を考慮した資源評価結果などに基づく、東部太平洋におけるカツオ資源の現状は不確実であるが、カツオ資源が悪化している明確な証拠はない。

管理方策

特段の資源管理方策はとられていないが、まき網漁業は 62 日間の全面禁漁及び沖合特定区での 1 か月間の禁漁措置が導入されており、結果的に漁獲努力量が制限されている。



東部太平洋におけるカツオの成長 (Matsumoto *et al.* 1984)

資源評価まとめ

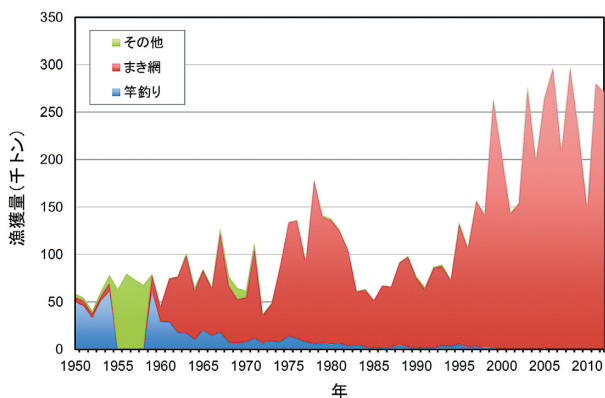
- IATTC により資源評価を実施。
- 資源量は加入量に伴い変化する。
- 東部太平洋におけるカツオ資源の現状は不確実であるが、カツオ資源が悪化している明確な証拠はない。

資源管理方策まとめ

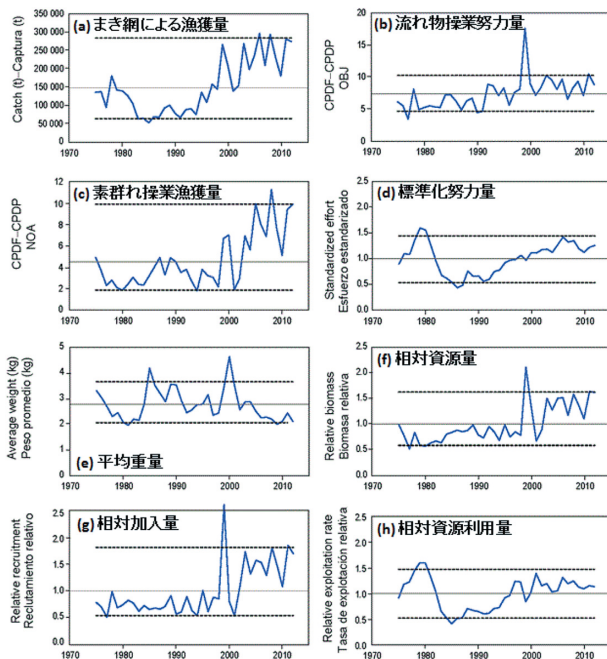
- 本資源には IATTC による資源管理方策はとられていない。

カツオ（東部太平洋）の資源の現況（要約表）

資源水準	高位
資源動向	横ばい
世界の漁獲量 (最近5年間)	14.7～29.7万トン 平均：24.5万トン (2008～2012年)
我が国の漁獲量 (最近5年間)	26～82トン 平均：57.3トン (2008～2012年)



東部太平洋における漁法別カツオ漁獲量（データ：IATTC 2013）



東部太平洋におけるカツオ資源指数（Maunder 2013 を改変）
 (a) まき網による漁獲量、(b) 流れ物操業努力量（CPUE）、(c) 素群れ操業努力量（CPUE）、(d) 標準化努力量、(e) 平均（漁獲個体重量（kg））、(f) 相対生物量、(g) 相対加入量、(h) 相対資源利用率
 (CPDF：Catch per days fished)